耕治人全集第二巻

一九八九年二月二〇日発行

著者　耕治人

発行者　株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二―一―一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六―六二七九九

堀内印刷・牧製本

© 1989 Yoshi Kô

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

耕治人全集

第二卷

江苏工业学院图书馆
藏书章

晶文社

監修　中川一政

本多秋五

編集委員　紅野敏郎

中島和夫

保昌正夫

村上文昭

題字　中川一政

ブックデザイン　平野甲賀

『耕治人全集』第二巻・目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

魯鈍な男　7
料理　32
暴力　52
暗い濠　70
窮鳥　91
懐胎　111
棟上げ　151
握飯　179
一夫一婦の悲しみ　191
詩人　千家元麿　212
生の傾向　296
すみ鼠　328

楠の下　370
根がけ　388
あじさい　431
大審問官　485
鯉　529
猿沢池のほとり　544
ぼけの花　572
解説　村上文昭　619

魯鈍な男

何ということであろうか。溺れるものは藁をもつかむというが、神尾本良氏を訪ねることを考えるようになったのだ。神尾氏と会わなくなってから三年あまり、今更のこのこ出掛けて行ける義理ではなかった。しかし私達は、大家(おおや)から立退きを喰っていた。路地の突当りの右手の家に、私達は住んでいたのであるが、大家は、私達の家と、むね続きの隣家をこわし、大家の住いを建てるというのであった。半年前に私達は移るようにいい渡され、隣家は、大家の江古田にある持家に、移って行った。私達は越す先のあてもなく、愚図愚図していると、大家は、同じ軒並びの、いまの家に、取敢ず越して呉れといったのであった。すでにこわし屋が入って、私達がそれまで住んでいた家の屋根ははがれ、壁は、打ち抜かれていた。そのほこりが、私達の、いまの住いまで、落ちて来るのであった。こわし屋の仕事の模様を見に来るのか、それとも、私達を、立退かせる催促に来るのか、毛糸の腹巻をした、頭のはげ上った大家は、一日おきくらいにやって来た。そして、

「どうかね。家はあったかね」

ということがあった。取りこわしがすむと、早速新築にかかるということだが、いずれは、いま私達が住んでいる家も、こわし庭にするという。大家はここから十五分ばかり行った東中野駅前の、蕎麦屋で、私達は、家賃がたまっていたので、強いことはいえなかった。

神尾家は、永福町にある。代田橋駅をおりて、二十分位あるくのだ。夏輝会の、搬入は、四日後に迫っていた。いま神尾家に行き、「僕も、今度は、夏輝会に出品しますよ」といえば、神尾氏は何と云うだろう。私は神尾家で暮したことがあるのだ。神尾氏は、審査の時、私の絵に、注意して呉れるかもしれないと思う。そんなことはあり得ない。審査は厳正で、実力がなければ、入選しないのだ。それは私もよく知っていた。だから、私が勤めを止め、油絵をやり出してからも、神尾氏のところに行かなかった。自分で、自分の道を、切開いて行くつもりであった。蓄えはなくなり、家内は、勤めに出るようになった。しかし私は自信はあったのだ。だから、今度大家から移された私達の家と、むね続きになっている隣家の、区役所の吏員が、「お互に、頑張りましょうぜ。裁判になれば、わし達が勝ちますからな。わしには弁護士の友人もあるから、大いに、家主と、やり合いましょう」

と、朝出掛けに、私の家の玄関により、けしかけるようにいって行くが、私は入選さえすれば、絵は売れるだろうから、不義理もすまし、新しい家を見付けて、越して行くつもりであった。大家は今までたまっている家賃は棒引きにする、引越料も出すといっているが、新しく借りる家の、敷金も、私達には、ないのであった。私の絵が入選し、展覧会場に飾られ、新聞に出れば、今まで私に冷い目を向けていた親戚も、手の裏を返したようになり、絵も売れるに違いないのだ。「もう暫くの辛抱だよ。入選すれば、お前の着物も買ってやるし、鏡台も、買ってやるよ」私は、家内によく言った。

度々の引越で、家内が私と一緒になった時持って来た鏡台は、こわれていた。「ほんとうに、そうなると、うれしいわ」家内は、言っていた。

それ程自信がある筈なのに、恥じもなく神尾氏を訪ねることを思いついたのは、どう言うわけであろうか。長い間無沙汰していて、突然展覧会の搬入前に、神尾家を訪ねれば、私は今度夏輝会に、出します、よろしく願いますということになるようだ。私は神尾氏が、依怙贔屓をする人でないことを、よく知っていた。しかし私に対する好意も知っていた。だから三年も無沙汰していて、突然訪ねるようなことが出来るのだ。訪ねなかったのは、むしろ神尾氏の好意を、信じ過ぎているからかも知れなかった。しかし私が神尾家に居た時は学生であったが、いまは家内もある。

しかし今は暮しが立つか、立たぬかの瀬戸際だ。もし落ちたら、どう言うことになるか。私は恥じも、卑屈さも忘れたのであった。

神尾家に近づくと、胸は、高鳴り、足は浮き、三年の年月は、吹っ飛び、私が神尾家に居た時のような気持に、返るのであった。夫人は、私を、玄関わきの、客間に通した。縁側の向うに、芝生が見えた。それは髪毛のように、のびていた。その芝生は、私が暑い夏の日に、植えたのであった。その時私は十九だった。それから、三年、私はいま私が坐っている客間で、暮したのだ。思い出が、胸をしめつけた。

夫人が、お茶と、菓子を、持って来た。

「いま女中が、お使いに行ってるんで」夫人は、私の来訪の目的を、知るわけもなく、私が、その部屋で、暮していた時と、少しも変らなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「なにぼんやりしていらっしゃるの。奥さんは、お元気。いまあなたなにしていらっしゃるの」
夫人は、邪気なく尋ねた。私ははじめ絵描きになるつもりで、知り合いの、神尾家に、居たのであった。それが志望を変更し、ある学校に入ると、卒業し、勤めてしまった。その頃は、神尾家を出ていたが、月に二三度、訪ねないことはなかった。振り出しに戻るつもりで、三年前絵をやりはじめてからは、流石に来れなかったのだ。
「いま絵を、やっていますよ」
私は自分の愚かさで、身がすくむ思いである。
「そう」夫人は、真顔になった。
「絵をやっていらっしゃるの」
夫人は、何かの機会で、私が絵をやっていることは知っていたに違いないと思われたがそう言った切りだった。
「これ陶善堂の、最中よ。知っていらっしゃる。あなたが、ここにいらした時に、大好きで、よく食べたのよ。ずい分来なかったから、あなた、忘れたでしょう。だけど、あたしは忘れないわ」
夫人は、急に笑い声を立てた。夫人は、皮肉を言っているのではなかったが、私はよこしまな思いと、思い出のため、瀬戸の皿の、最中が、陶善堂のものとは、気がつかなかった。その最中を出して呉れた夫人の気持も、察することが出来なかった。陶善堂は、代田橋駅近くにある古い菓子屋で、最中は評判だった。堕ちた身に、夫人の言葉は、しみ渡り私は蘇った思いで、最中を手に取り、
「先生は」

と聞くと、夫人はすぐ「旅行よ」と言った。私は思い掛けなかったので、ぽかんとし、
「旅行ですか。夏輝会の搬入前じゃないですか」
展覧会を前にして、旅行などしている神尾氏を責めるように言うと、
「だから、旅行じゃないの。福地に行っていますわ。写生旅行よ。知ってるじゃないの」
夫人は、私の迂濶を、明るく笑った。
その通りであった。それに気づかぬ程私は長く無沙汰して居たのであったし、自身の用件だけに、気を取られていたのだ。私がここに居た時から、神尾氏は、よく旅行した。特に夏輝会が開催される前には、一カ月も、二カ月も同じ場所に、カンバスを据えるのであった。私も夫人が、神尾氏に、私が来たことを知らせないのはおかしいと思っていた。神尾氏が、仕事中かも知れぬし、女中の帰りを待っているのかも知れないなど思ったのであった。神尾氏のアトリエは、棟が、別になっていた。私は気が沈み込み、
「いつお帰りですか」
と言ったが、声はかすれた。夫人は、まだ私の用件を察せず、
「そうね、八日頃でしょう」
と、事もなげに言った。搬入は、五日と、六日だった。私はその日手ぶらであったが、搬入までには、どれを出品するか、沢山ある私の絵から、神尾氏に、選んで貰い度いと思ったのだ。三年の間かきためた絵から、神尾氏が出品する絵を、選ぶということは、考えようによれば、神尾氏に、ある責任を負わせるようである。しかし出品画の審査は、神尾氏だけではない。審査員全員が見るのである

し、新聞記者や、美術評論家も、立会うということであった。そこにみじんの因縁情実のありようはなかった。理窟は、その通りであった。しかし私の、愚かさは、頼みにしてはならぬものも、当てにするのであった。私のはげしい気の落し方を夫人は気の毒に、思ったらしかった。

「どうなさったの。何か主人に御用」

夫人は、私が久方振りに訪ねて来て、神尾氏に、会えないので、がっかりしていると、思っているのだ。私の顔を覗き込むようにして言った。そうなれば、私も用件を言わないわけに行かなかった。

「ええ、夏輝会にね、出品しようと思うんですよ。その前、どれを出すか、かきためた絵のなかから、選んで戴きたいと思って」

「そう、それは困ったわね」夫人は、考える様子をした。夫人も、なんとかしたいようであった。私は夫人の好意に甘え、

「僕、先生のところに、行ってみましょうかしら」

と、突然頓狂な、高い声を出した。

「そうね。あなたさえかまわなければ、それよりほかに、ないわね。主人はびっくりするわ。だけど、喜ぶわ。徳山さんも、真野木さんも一緒よ。甲府から、鉄道に乗って、福地でおりるの。主人のお友達が、そこにいるのよ」

夫人は、私の気持を知らず、親切に、言って呉れた。私は、徳山と、真野木が一緒だということを聞いて、行き度くない気がした。徳山も、真野木も、私がここに居た時、よくやって来た絵描きだ。年齢も私と同じ位だ。私が廻り道をし、絵をやり出した時は、すでに、一途に描いて来た徳山と、真

野木は、夏輝会の、賞も貰い、会友になっていた。私が今まで神尾氏を訪ねなかった理由の一つは、徳山や、真野木に会い度くなかったからであった。何のわけもないのに、反感めいたものも持っていた。しかし今は、そんな腐ったような気持に、かまっていられなかった。

「それじゃなんだか突然で、先生を驚かすようですけど、僕は、福地に行って来ますよ」

「そう、大変ね。いついらっしゃる」

「明日か、明後日行きます。搬入まで四日しかありませんからね。早い方がいいと思うんですよ」

私が、日時をはっきりさせられぬのは、これから、旅費を作らねばならぬからであった。福地は、甲府から、四十分位だと、夫人は言った。甲府まで五時間として、日帰りが出来る。もし泊ることがあっても、神尾氏のところに寝ればよいから、宿料は心配なかった。ただ汽車賃さえあればよかった。しかしその汽車賃が、私達にはなかった。五円の金さえないのであった。私は旅費のことを考えると、落着かなくなった。

「これから仕度もありますから、それじゃ失礼します」

「そう、ゆっくりしていらっしゃればいいのに」

いつも変らぬ夫人の好意に、甘え切った馬鹿な私は、そこで、冗談のように、

「審査の日には、先生は帰って、いらっしゃるんでしょうねえ」

と言った。柔かく、頬笑んでいた夫人の顔が、突然、厳しく、冷たくなったように感じられた。しかしそれは瞬間のことであった。

「それあ審査員ですもの、審査の日までには、帰りますわ」

私は自分の醜さに、声が出ず、ようやく立上り、あたふたと、玄関に行った。
「主人にお会いになったら、よろしくね。うちでは、みんな元気だって、言って頂戴」
夫人が私の後を追い、今までと変りない明るい調子で、冗談のように言った。
夫人は、あまり長い間顔を見せぬから、福地くんだりまで、出掛けねばならなくなるのだとは言わなかった。福地まで行く私の下心を、知らないのか、嫌な顔もせず、紙切れに、神尾氏の、宿をかいて呉れた。福地まで絵を見せに行くのは、大変なようであるが、徳山や、真野木は、神尾氏と同じ宿か、近くに宿を取り、一月、二月、神尾氏と、一緒に、描くのであった。代田橋駅から、電車に乗り、新宿で中央線に乗換え、柏木の家に帰って来るまで、私はもう旅費を作ることより念頭になかった。友達や、知った顔など浮べたが、借りるところはなかった。借り尽していた。カンバスや、絵具さえ、困っていたのだ。私は、家内の帰りを待った。
五時頃、家内は帰って来た。玄関の、重い暗いガラス戸を明けると、すぐ六畳の、私のところにやって来て、
「いかがでしたの。神尾さんにお会いになれて」と言った。
「それがね、福地に行ってるんだ。搬入まで帰って来ないんだよ。奥さんに会って来た」
「そう、困ったわね」
家内は暗い顔をした。家内も、搬入前に、出品する絵を選んで貰うことが、入選を意味するのでないことは知っていても、気持の底では、矢張入選と、結び付けて、考えているようであった。私と、一緒になった当座は、よく家内を神尾家に、連れて行ったのであった。

家内は、私が神尾氏に、出品画を、選んで貰うと言い出すまで、神尾氏のことは、口にしたことはなかった。私が言い出すと共に、当てにし出したようだ。大家から、立退きを、喰っているからか、ここで、私が入選せねば、私達の暮しは、どうにも出来ないと思ったからか。そんなことも、勿論あるだろう。しかし私が神尾氏を、当てにし出したから、家内も、当てにし出したのに違いなかった。

「それでどうなさるの」

家内は、坐ると、夫人と同じようなことを言った。

「どうしても、絵を選んで貰ったがいいと思うからね。福地に、行きたいんだ。奥さんに話し、宿の名前も、書いて、貰って来た」

「そう。それがいいわ」

家内はいきなり言った。今まで大事なことは、賛成して来たように家内は、旅費の当てもないのに、賛成したのであった。私は家内の言葉に、救われる思いがし、

「しかし旅費がないからね。旅費を作らねばならないんだ」

「そうね。困ったわね。こんな時蓄えがあるといいんだけど。あなたの方でなんとかならないかしら」

「帰る途、考えて来たけれどもね。どう仕様もないんだ」

「——だけどあなたどうしても、行かなくちゃならないでしょう」

「そうだ」

「なんとかしましょうよ。あたしもやってみるから、あなたも、作るようにして頂戴」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.